

小笠原の森林への心遣い

小笠原諸島森林生態系保全センター



小笠原諸島森林生態系保護地域では、過去に一度も大陸と陸続きになつたことのない海洋島で独自の進化を遂げ、他では見られない貴重な野生動物は外来種に対して非常に弱い弱であり、人の生活とともに燃料用、飼養動物、貨物に紛れ込んで上陸した動物などによって、存続が危ぶまれている種があることから、小笠原諸島で固有の森林生態系を取り戻す取組を進めています(第137号既報)。

具体的には、アカギ、ギンネム、モクマオウなどの外来植物を駆除しています。①アカギは萌芽力が強く、伐採して集積した輪切りのところから芽が吹き、②ギンネムは土壌



外来種が生育した森



アカギの伐採後

に埋まった埋土種子が20年後にも発芽すると言われており、駆除地の状況を見ながら、繰り返し作業が必要となっています。

駆除に当たっては、小さいものであれば抜き取り、ダム集水域以外などでは法令等により許可された農薬を用いた駆除、村民やガイドツアーの利用が可能なルート周辺や下層に希少植物などが繁茂している場所などでは、入林者の危険防止や植物保護のため特殊伐採などの方法を用いています。

また、駆除に当たっては、植物、鳥類、昆虫類、陸産貝類(カタツムリ類)、陸水動物(フナムシなど)についての事前モニタリング、薬剤使用箇所の水質・土壌などの事後モニタリングを実施し、駆除が野生動物に影響を与えていないか確認しています。

父島や母島では標高百メートルでも雲霧が発生する場所があるなど、気象条件や立地条件の違いから、同じ島の中でも異なる進化や植生が見られるため、外来植物を一気に駆除するわけにはいかず、周辺環境に配慮した作業が求められます。

父島や母島では標高百メートルでも雲霧が発生する場所があるなど、気象条件や立地条件の違いから、同じ島の中でも異なる進化や植生が見られるため、外来植物を一気に駆除するわけにはいかず、周辺環境に配慮した作業が求められます。



アカギの特殊伐採

特殊伐採とは、周囲の樹木などを傷つけないよう、作業員が木の幹を少し上まで登り、チェーンソーで木の幹を切り落とす方法です。

なお、大きくなりすぎた外来種の駆除は、その地域の光環境や土壌環境に大きな影響を与えます。駆除した後からまた外来植物が再度繁茂しないよう、周辺にある植物の生育状況を見ながら駆除することが重要です。

さらに、外来植物により作られた自然環境であっても、それを利用・順応する固有の野生生物が見られることから、それらの生物が本来あるべき生息環境で暮らせるよう外来植物の駆除速度にも配慮が必要となっています。



外来種駆除後の昆虫モニタリング